

## 俳句の理解に関する実験的研究

森 敏 昭

An experimental analysis of comprehension of a haiku

Toshiaki Mori

The present study examined the effects of writing a composition on a haiku upon comprehension of the haiku. Subjects were divided into two groups (Writing-Before group and Writing-After group). The task sequence of the Writing-Before group was as follows: (1) writing a composition on a haiku, (2) the first impression rating of the haiku (semantic differential technique), (3) evaluation of a composition written by a stimulus person, (4) inferring the impression rating of the stimulus person on the basis of his composition on the haiku, and (5) the second impression rating of the haiku. The task sequence of the Writing-After group was the same as that of Writing-Before group except that the subjects wrote a composition at the end of the sequence. The results indicated that the Writing-Before group inferred the impression ratings of the stimulus person more accurately than the Writing-After group and the discrepancy of impression ratings between Writing-Before group and stimulus person decreased in the second impression rating. Theoretical implications of these findings were discussed.

Key words: comprehension of a haiku, writing a composition, semantic differential technique, evaluation of a composition.

従来の文章理解の研究では、物語文や説明文を題材として用いることが多く、詩歌を題材とする文章理解の研究はこれまであまりなされていない。その理由は、おそらく、物語文や説明文の理解過程を捉えることの方が、詩歌の理解過程を捉えることよりもはるかに容易であることによるのであろう。物語文や説明文を題材とする文章理解の研究では、文章に明示された意味を正確に読み取ることが重要な問題となる。つまり、理解の正しさが問題とされるので、“正しい理解”の客観的基準を設定し、その基準に照らして理解の程度を測定することが比較的容易である。これに対し詩歌の場合には、作者が読者に伝えようとしている作者の心情や心象世界は、隠喩などのレトリックを駆使して象徴的に表現されることが多く、必ずしも文章中に明示されるとは限らない。このため、詩歌の理解においては、作品の表面的な意味が正しく理解されただけでは、真に理解がなされたとは言えない。読者の側で、作者

の心情や心象世界を推理し、追体験し、そこに何らかの共感や感動を覚えるまでに“深い理解”がなされることによって、初めてその作品が理解されたと言えるのである。しかも、そのような“深い理解”は多分に主観的な理解であるため、客観的な理解の基準を設定し、その基準に照らして理解の程度を測定することは、きわめて難しい。

以上のような研究の困難さの故に、詩歌が文章理解の題材として取り上げられることはこれまであまりなかった。しかしながら、最近ようやく、そのような研究の困難さを乗り越えようとする試みがなされ始めた。例えば、小谷津（1984）は児童詩を題材とし、その評価や添削過程のプロトコル分析を行っている。その結果、詩歌の理解過程には、既有知識を積極的に喚起し、自己の内的イメージを拡大し、さらに自己との共感を核にした内的なモニタリングの機能が必要となることを明らかにしている。また、石黒（1986）は、作者ま

たは登場人物の気持ちになって補足詩を書かせるという手法を用い、読み手の視点が作者や登場人物の視点と多声的に重なり合うことによって詩の心象世界が再構築されていくプロセスを捉えている。このように、最近ようやく詩歌の理解の研究に取り組む気運が芽生えてきたとはいえるものの、研究の数は決して多いとは言えない。また、十分な検討がなされていない問題も数多く残されている。中でも、教育心理学の立場からは、詩歌の理解を促進するための方法について検討することが、早急に取り組まなければならない重要な研究課題であろう。

物語文や説明文を題材とする“正しい理解”の促進法に関しては、先行オーガナイザー、視点、タイトルなどを教示することによって読み手の既有知識やスキーマを賦活することの有効性を示す研究が既に数多くなされている。(Ausubel, 1968; Bower, Black, & Turner, 1979; Chiesi, Splich, & Voss, 1979; Spiro, 1980)。それに比べると、詩歌を題材とする“深い理解”の促進法に関する研究は、わずかに鹿内(1983a, 1983b, 1984a, 1984bなど)の一連の研究などが散見されるにすぎない。そこで本研究では、俳句を題材として取り上げ、その理解のプロセスを明らかにすると共に、“深い理解”を促進するための方法について実験的な検討を行う。

本研究では、次の2つの方法が、俳句の理解を促進するのに有効であるかどうかを実験的に検討した。第1は、他者による理解を感想文の形で呈示する方法の有効性である。俳句の理解の場合には、説明文の理解の場合のように、唯一の正しい理解を想定すべきではない。同じ俳句であっても、おそらく様々な理解が可能であり、たとえ作者の意図とは異なる理解がなされたとしても、読み手が納得し共感を覚えるような何らかの深い水準の理解がなされた場合には、それを間違った理解とすることはできない。そして、そのような深い水準の理解に達するまでには、おそらくいくつかの可能な理解を相互に比較・評価するプロセスが必要となるのではないであろうか。もしそうだとすれば、他者による理解を呈示することは、そのような比較・評価のプロセスを活性化することになり、読み手の理解を深める契機になると考えることができるであろう。第2に、他者による理解を感想文として呈示するのに先立って、読み手自身に感想文を書かせることの有効性について検討した。従来の説明文の理解の研究では、要約文やノートを作成するなどの能動的な活動を行うことによって理解が促進されるという結果が見出されている(Kiewra, 1985; 桐木・石田・岡・森, 1981; 石田・桐木・岡・森, 1982; Meyer, 1984)。このことは、

外見上は受動的な過程であるかに見える文章理解の過程は、実はきわめて能動的な活動を要する過程であることを示しており、要約作業を課すことによってそのような能動的な活動を促すことが、説明文の理解を促進することにつながると解釈することができる。全く同様のことが俳句を理解する場合にも当てはまるのではないであろうか。俳句を理解する過程も、様々な観点に立って句意の解釈を試みたり、それらの解釈を比較・評価することによって最も妥当だと思われる解釈を選択するなどの活動を含む、きわめて能動的な過程だと考えられる。従って、感想文を作成する課題を課すことは、そのような能動的な活動を促すことになり、俳句の理解を深める効果を持つのではないであろうか。

## 方 法

**被験者** 50名の大学生が被験者であり、25名ずつ無作為に2条件に割り当てられた。

**材 料** 加藤愁郎の「夾竹桃しんかんたるに人をにくむ」という俳句を理解の題材とした。この俳句を選んだ理由は、あらかじめ行った調査によって、この句はかなり難解であり、また、多様な解釈の可能な句であることが確かめられたので、本研究の目的には適していると思われたからである。

**実験計画および手続き** 作文先行条件と作文後続条件の2条件を設けた。作文先行条件の被験者には、まず上記の俳句が呈示され、「この俳句はどのような心情や情景を詠んだものだと思うか、自由に解釈して作文を書いて下さい」という教示の下に、感想文を書く課題が課された。次に、15の形容詞対(Table 2参照)について1回目の印象評定(7段階評定)を行った。その後、他者の書いた感想文(Table 1)が呈示され、その感想文に対して、①客観的総合評価(客観的にみてどのくらいうまい作文と言えるか。)、②主観的総合評価(主観的にみてどのくらいその作文が好きか)、③説得力(作文を書いた人の心情が説得力を持って伝わってくるか)、④表現力(個々の文の表現や言い回しが巧みであるか)、⑤構成力(作文全体の構成が整っているか)、⑥独創性(文章全体にユニークさや個性が感じられるか)の6尺度についての評価(10段階評定)を行った。さらに、その感想文を手掛かりにして、「この感想文を書いた大学生にも俳句を読んで感じた印象を15の形容詞対について評定してもらっています。その大学生はいったいどのように評定していると思うか。書かれた感想文を手掛かりにして推測してみてください(その大学生になったつもりで評定してみてください)」という教示の下に、他者の印象評定の推定を行った。最後

に、1回目の印象評定と全く同じ手続きで2回目の印象評定を行った。作文後続条件の被験者もこれと同じ内容の作業を行ったが、作業の順序が異なっていた。即ち、「1回目の印象評定」、「他者の感想文の評価」、「他者の印象評定の推定」、「2回目の印象評定」、「感想文の作成（実験計画上は必要ないが作文先行条件と作業時間を等しくするために行った）」の順序で作業を行った。

Table 1 他者の書いた感想文

広島市の町には夾竹桃が多く植えられている。もちろん広島の木々は戦後に植えられたものがほとんどであるから、夾竹桃も戦火を経てはいないだろう。しかし、この句を読むとき、緑あつて広島で暮らしている私には、夾竹桃と原爆で灼かれた広島とを結び付けずにはいられない。

例年、広島は夏はひどく暑い。おそらく、夾竹桃の自生地インドにも似た暑さなのであろう。夾竹桃は深い緑の葉と鋭いコントラストをなす赤い花をつける。ちょうどその時期、広島は原爆の日を迎える。戦争を知らぬ世代に属する者にも、この季節の広島は、人の業とも言うべき戦争の悲惨さや愚かしさが、遠い過去に属するものではなく、今も常に身近にあるということを思い出させる。私が今立っているこの場にも、あの日、人が倒れていたのかもしれないのに、もう繰り返さないと誓ったはずなのに、しかし今また、我々は戦争の準備をしている。夏の昼日中、森閑として咲いている夾竹桃を見るとき、人の業を一身に背負わされたような心地にさせられる。

この句は、このような時のやり場のない、じりじりとした焦りにも似た怒りを夾竹桃の木に投影して作られたように思われる。

## 結 果

**印象評定値の変化** 15の形容詞対についての印象評定値が、1回目の評定と2回目の評定でどのように変化するかを分析し、Table 2に示した。評定は7段階評定で中立点は4であるので、理解の題材として用いた「夾竹桃しんかんとるに人をにくむ」という俳句は、総じて、「深みがある」、「暗い」、「固い」、「複雑な」、「冷たい」、「重い」、「高尚な」、「悲しい」という印象を与える俳句であることがわかる。条件（作文先行条件と作文後続条件）×評定試行（1回目と2回目）の2要因の分散分析の結果を要約すると次のようである。

①有意な条件の主効果がみられたのは、「明るい…暗い」の尺度 ( $F=7.86, df=1/48, p<.01$ ) と「高尚な…低俗な」の尺度 ( $F=6.44, df=1/48, p<.05$ ) の2尺度であった。即ち、作文先行条件の被験者の方が作文

後続条件の被験者よりも、この句をより「暗く」、より「高尚な」印象を与える句だと評定した。

②試行の主効果が有意であったのは、「深みがある…深みがない」の尺度 ( $F=20.49, df=1/48, p<.01$ )、「迫力がある…迫力がない」の尺度 ( $F=26.58, df=1/48, p<.01$ )、「親しみやすい…親みにくい」の尺度 ( $F=8.74, df=1/48, p<.01$ )、「単純な…複雑な」の尺度 ( $F=10.79, df=1/48, p<.01$ )、「軽い…重い」の尺度 ( $F=13.92, df=1/48, p<.01$ )、「高尚な…低俗な」の尺度 ( $F=15.48, df=1/48, p<.01$ )、「悲しい…嬉しい」の尺度 ( $F=20.81, df=1/48, p<.01$ )、の7尺度であった。即ち、2回目の評定値は1回目の評定値に比較すると、より「深みがある」、より「迫力がある」、より「親しみやすい」、より「複雑な」、より「重い」、より「高尚な」、より「悲しい」という方向への変化を示した。

③条件×評定試行の交互作用がみられたのは、「リズム感がある…リズム感がない」の尺度 ( $F=4.86, df=1/48, p<.05$ )、と「動的な…静的な」の尺度 ( $F=4.98, df=1/48, p<.05$ )、の2尺度であった。即ち、作文先行条件では2回目の評定値は1回目の評定値に比較すると、より「リズム感がある」、より「動的な」という方向への変化を示すのに対し、作文後続条件ではそのような変化を示さなかった。

**他者の感想文の評価** Table 3に、他者の感想文に対する2種類の総合評価（客観的総合評価および主観的総合評価）および4種類の観点別評価（説得力、表現力、構成力、および、独創性）の平均評定値を条件別に示した（いずれもの評価も10段階評価で尺度の中立点は5.5である）。この表より、本研究で用いた他者の感想文は、総じて、客観的総合評価の方が主観的総合評価よりも高く、また、観点別評価では独創性の評価が他の3つの観点別評価よりも低いことが明らかである。なお、いずれの評価尺度においても、作文先行条件と作文後続条件の間に有意差はみとめられなかった。

**印象評価値のズレの指標** 被験者の1回目の印象評定と2回目の印象評定のズレ、被験者による他者の印象評定の推定のズレ、1回目の印象評定と他者の印象評定のズレ、2回目の印象評定と他者の印象評定のズレという4種類のズレの指標を被験者ごとに算出し、その平均値を条件別に示したのがTable 4である。これらのズレの指標は、15の形容詞対における2つの評定値のズレ（差）の2乗和を15で割って平均し開平することによって算出した。このズレの指標について、条件（作文先行条件および作文後続条件）×ズレの種類（推定のズレ、1回目の評定と他者評定のズレ、および、2回目の評定と他者評定のズレ）の2要因の分散分析

Table 2 俳句の印象評定値の変化

設定値 (1)	作文条件				設定値 (7)
	作文先行条件		作文後続条件		
リズム感がある	4.48	3.60	4.12	4.16	リズム感がない
深みがある	2.60	1.80	2.96	2.08	深みがない
明るい	5.96	6.24	5.44	5.64	暗い
迫力がある	3.84	2.56	3.84	2.68	迫力がない
親しみやすい	5.52	4.40	5.00	4.64	親しみにくい
固い	2.48	2.32	2.92	2.64	柔らかい
派手な	5.52	5.48	5.56	5.64	地味な
動的な	5.68	4.92	5.36	5.52	静的な
単純な	5.72	6.32	5.44	5.88	複雑な
おもしろい	4.32	3.96	4.16	3.92	つまらない
冷たい	2.56	2.96	2.52	2.84	暖かい
軽い	5.88	6.40	5.44	6.08	重い
野暮ったい	3.84	3.88	3.80	3.80	しゃれている
高尚な	2.84	2.16	3.36	2.80	低俗な
悲しい	2.44	1.64	2.80	2.16	嬉しい

Table 3 他者の作文の平均評定値

条件	客観的	主観的	説得力	表現力	構成力	独創性
作文先行条件	8.24	6.92	7.92	7.88	7.64	6.52
作文後続条件	8.16	6.72	8.12	7.96	7.48	6.08

Table 4 推定のズレの指標の平均値

条件	ズレの指標			
	1回目と2回目	推定のズレ	1回目と他者評定	2回目と他者評定
作文先行条件	1.35	1.80	2.16	1.91
作文後続条件	1.31	2.00	2.13	2.04

Table 5 ズレの指標および作文の評定尺度間の相関  
(上三角行列は作文先行条件, 下三角行列は作文後続条件)

	D1	D2	D3	D4	E1	E2	E3	E4	E5	E6
D1	1.00	.214	.350	.092	.181	.279	.229	.248	.351	.146
D2	-.032	1.00	.212	.581	.097	-.046	.044	.029	-.143	-.129
D3	.439	.052	1.00	.364	-.031	-.465	-.390	-.054	.121	-.073
D4	-.224	.546	-.037	1.00	-.253	-.312	-.423	-.557	-.502	-.468
E1	.051	.014	-.127	-.033	1.00	.283	.726	.638	.498	.477
E2	.096	.120	-.060	.085	.233	1.00	.579	.303	.519	.462
E3	.024	-.215	-.090	-.127	.706	.364	1.00	.631	.625	.682
E4	-.101	-.200	.107	-.118	.637	.161	.770	1.00	.819	.431
E5	.047	-.187	.001	-.069	.713	.016	.692	.629	1.00	.455
E6	-.153	-.375	.071	-.109	.075	-.283	.281	.389	.189	1.00

D1 : 1回目と2回目

D2 : 推定のズレ

D3 : 1回目と他者評定

D4 : 2回目と他者評定

E1 : 総合(客観的)

E2 : 総合(主観的)

E3 : 観点別(説得力)

E4 : 観点別(表現力)

E5 : 観点別(構成力)

E6 : 観点別(独創性)

を行うと、ズレの種類の主効果 ( $F=21.43, df=2/96, p<.01$ ) および両要因の交互作用 ( $F=5.35, df=2/96, p<.01$ ), が有意であった。交互作用が有意であったので、条件ごとにズレの種類の変因の単純主効果の検定を行うと、作文先行条件ではズレの種類の変因の単純主効果が有意であった ( $F=24.08, df=1/96, p<.01$ )。そこでシェーフィの法によって多重比較を行うと、1回目の評定と他者評定のズレは、推定のズレおよび2回目の評定と他者評定のズレよりも有意に大きかった (いずれの比較も  $p<.05$ )。これに対し、作文後続条件ではズレの種類の変因の単純主効果は有意ではなかった。また、ズレの種類の変因の各水準において条件の変因の単純主効果の検定を行うと、推定のズレにおいては条件の単純主効果が有意であり ( $F=7.28, df=1/144, p<.01$ ), 2回目の評定と他者評定のズレにおいても単純主効果の傾向がみとめられた。 ( $F=3.19, df=1/144, p<.10$ )。即ち、作文先行条件の方が作文後続条件よりも有意に推定のズレが小さく、2回目の評定と他者評定のズレも小さくなる傾向がみとめられたのである。

**ズレの指標と感想文の評定尺度間の相関** 上記の4種類のズレの指標および他者の感想文の評定に用いた6つの尺度の評定値間の相関係数 (ピアソンの偏差積相関係数) を条件ごとに算出し、Table 5に示した。この表から次のような結果を読み取ることができる。

①作文先行条件においても作文後続条件においても、推定のズレの指標と2回目の評定と他者評定のズレの指標との間に有意な正の相関がみられた。この結果は、推定のズレが小さいほど、被験者の2回目の印象評定が他者の印象評定に近づく傾向があることを示している。

②作文先行条件においては、1回目の評定と他者評定のズレの指標と、主観的総合評価の尺度および説得力の尺度との間に有意な負の相関がみとめられた。このことは、被験者の1回目の評定と他者の評定との間のズレが大きいかほど、他者の感想文の主観的総合評価や説得力の評価が低くなる傾向があることを示している。なお、作文後続条件においては、このような傾向はみとめられなかった。

③作文先行条件においては、2回目の評定と他者の評定のズレの指標と、説得力、表現力、構成力、独創性の尺度との間に有意な負の相関がみとめられた。このことは、他者の感想文をこれらの評定尺度において高く評価する被験者の2回目の印象評定は、他者の印象評定に近づく傾向があることを示している。なお、作文後続条件においては、このような傾向はみとめら

れなかった。

④作文の評定尺度間には相互に高い正の相関がみとめられた (特に作文先行条件において)。

## 考 察

本論文の最初に述べたように、詩歌の理解の研究がこれまであまりなされなかった理由は、理解の程度を測定するための客観的な基準を設定することが困難であることにありと考えられる。このような方法論上の隘路を突き崩すためには、個々の被験者内で何らかの基準を設定し、その基準に照らして被験者の理解が変化していくプロセスを捉えることが1つの有効な手段となるのではないであろうか。また、被験者の理解の変化をもたらす要因を組織的に分析することによって、詩歌の理解の仕組みを明らかにするための有効な手掛かりを得ることができるのではないであろうか。このような考えに基づき、本研究では他者の感想文を呈示することによって被験者の理解がどのように変化するかを分析した。その結果、1回目の印象評定と2回目の印象評定との間に多くの尺度において有意差がみられたことに明瞭に示されているように、被験者の理解には変化が生じることが明らかとなった。しかも、その変化は被験者の内部での自動的变化というよりも、他者による理解が感想文の形で呈示されたことによってもたらされた変化であると解釈するのが妥当である。なぜならば、印象評定に有意な変化が生じた7つの尺度のうち、「親しみやすい・・・親みにくい」という尺度の他は、いずれも他者の評定値の方向 (尺度の中立点を境にして) への変化を示しているからである (Table 2参照)。

ここで、当然、「被験者の印象評定値が他者による印象評定値に近づく方向へと変化することは、必ずしも理解が“深くなった”ことを意味しないのではないか」という疑問が生じるであろう。これは的を射た疑問であるが、この点の論議を深めるためには、とりあえず俳句の理解過程に関して大まかなモデルを想定しておく必要があるであろう。人が俳句を理解するプロセスはおそらく各人各様であり、一般的なモデルを想定することは容易ではない。しかしながら、おそらくは何らかの形で次の3つの過程が介在しているのではないであろうか。即ち、第1に俳句の文字通りの意味を読み取る過程、第2に俳句の文字通りの意味の背後にある意味、つまり、作者がその俳句によって表現しようとしている、作者の心情や感性の世界を解釈するための観点や視点を着想する過程、第3にいくつかの観点や視点に基づいて俳句の解釈を行い、その中から最も

共感や感動を覚える解釈を選択する過程の3つである。俳句の理解過程がこのような3つの過程からなると仮定するならば、他者の感想文を呈示することは、主に第2および第3の過程に影響を及ぼすことになるであろう。言うまでもなく、俳句の理解においては唯一の正しい解釈が存在するわけではない。およそ文芸作品というものは、それが発表された瞬間に作者の手を離れて読者との共有物となる宿命にある。従って、作者の意図とは異なる解釈がなされたとしても、その解釈が読者の共感や感動を呼び起こすものであれば、それも1つの解釈として認められるべきである(もちろん、明らかに無知ゆえの曲解や誤解とみなされる解釈は論外とすべきである)。このように同一の俳句に対していくつもの解釈が可能であるとするならば、俳句を深く理解することができるかどうかは、そのための適切な視点や観点を着想できるところにかかっていることになる。つまり、俳句のよい読者になるための重要な条件の1つは、適切な視点や観点を着想できる発想の豊かさや柔軟さを持つことであると言えるであろう。ところが、特に初心者の場合には、そのような視点や観点を自らの力で着想することができないため、専門家の解説に導かれることによって初めて深い理解に到達することも少なくない。但し、他者による理解を呈示することが理解を深める契機となるためには、自分自身の理解の視点がある程度確立しておくことが前提となる。このことは、作文先行条件と作文後続条件とを比較した本研究のデータからも読み取ることができる。

作文先行条件と作文後続条件との比較で、まず注目すべき結果は、作文先行条件の方が作文後続条件よりも他者の印象評定の推定が正確であったことである。他者の感想文の中には、印象評定で用いた15の形容詞対についての直接的な言及は含まれていない。それにも関わらず、作文先行条件の被験者は、感想文を手掛かりにして他者がどのように評定しているかがある程度推定することができたのである。作文先行条件と作文後続条件は、感想文を最初に書くか最後に書くかが異なっているだけである。従って、作文先行条件の被験者の推定が正確であったのは、この条件の被験者が推定を行うのに先行して自ら感想文を書いたことに起因していることになる。感想文を書くためには、少なくともある程度、被験者自身の解釈の視点を確立しておくことが必要であろう。つまり、感想文を書く過程で被験者が自分自身の解釈の視点がある程度確立したことが、他者の印象評定の推定を正確にするという実験結果をもたらしたと考えられるのである。

ところで、「被験者の印象評定値が他者による印象評

定値に近づく方向へと変化することは、必ずしも理解が“深くなった”ことを意味しないのではないか」という先程の疑問は、本実験の場合には必ずしも妥当しないことが、2回目の評定と他者の評定のズレの指標と、説得力、表現力、構成力、独創性の尺度との間に有意な負の相関が認められたことに示されている。被験者は無批判に他者の解釈を受け入れ、その方向へと理解を変化させたわけではないのである。被験者は被験者なりに他者の解釈の妥当性を評価し、妥当性が高いと評価した場合に他者の印象評定値の方向へと自分自身の印象評定値を変化させているのである。本実験で用いた他者の感想文は、Table 3に見られるように、主観的総合評価や独創性の尺度を除けば、かなり高い評価が与えられている。俳句に馴染みの薄い本研究の被験者にとっては、同じく俳句とはあまり縁のない大学生の解釈も、それなりに説得力がある解釈と思えたのであろう。作文先行条件の被験者は、感想文を書くことによって自らの解釈をある程度確立し、そのことによって他者の解釈をより正確に、かつ深く理解することが可能となり、そして他者の解釈の方が自分の解釈よりも妥当性が高いと判断してその方向へと理解を変化させたのではないであろうか。

このように、本研究の収穫は、これまでとかく等閑視されがちであった俳句の理解過程をとりあえず実験的研究の俎上にのせることができたこと、そして、感想文を書くことを通じて自分なりの解釈をある程度確立させ、その上で他者の理解を感想文の形で呈示することが俳句の理解を深めるための1つの有効な方法となることを示し得たことであろう。もちろん本研究は、まだ探索的研究の段階を脱しておらず、得られた結果がどの程度の一般性を有するかについての検証も決して十分ではない。従って、実験結果の考察においても、十分な証拠に基づいた説得力のある論議を展開できる段階ではない。しかしながら、本研究を足掛かりの1つとして実験研究を積み重ねることにより、文章理解の研究を“正しい理解”だけでなく“深い理解”の問題をも視野に入れた研究へと展開させることも可能となるのではないであろうか。

## 引用文献

- Ausubel, D.P. 1986 *Educational psychology: A cognitive view*. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Bower, G.H., Black, J.B., & Turner, T.J. 1979  
Scripts in memory for text. *Cognitive Psychology*,  
11, 177-220.

- Chiesi, H., Splich, G., & Voss, J.F. 1979 Acquisition of domain-related information in relation to high and low domain knowledge. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 18, 257-274.
- 石田 潤・桐木建始・岡 直樹・森 敏昭 1982 文章理解における要約作業の機能 教育心理学研究, 30, 322-327.
- 石黒広昭 1986 詩の読み=創作過程に現れる視点の多重性について 日本心理学会第50回大会発表論文集, 423.
- Kiewra, K.A. 1985 Investigating note-taking and review: A depth of processing alternative. *Educational Psychologist*, 20, 23-32.
- 桐木建始・石田 潤・岡 直樹・森 敏昭 1981 文章の読解に及ぼす要約作業の効果 教育心理学研究, 29, 161-165.
- 小谷津孝明 1984 児童詩の理解と添削のプロセス 日本心理学会第48回大会発表論文集, 448.
- Mayer, R.E. 1984 Aids to text comprehension. *Educational Psychologist*, 19, 30-42.
- 鹿内信善 1983a 現代詩の読み指導に関する実験的研究——指導プログラム案の作成と効果の検討 読書科学, 27, 10-19.
- 鹿内信善 1983b 現代詩の読み指導に関する実験的研究(II)——指導プログラムの効果の要因分析 読書科学, 27, 121-130.
- 鹿内信善 1984a 詩の教材解釈に対するフォーカシング技法の適用可能性 読書科学, 28, 8-16.
- 鹿内信善 1984b 詩の教材解釈に対するフォーカシング技法の適用 読書科学, 28, 71-80.